

---

# 流星のロックマン ギャラクシー

アクセス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

流星のロックマン ギャラクシー

### 【Nコード】

N3432G

### 【作者名】

アクセス

### 【あらすじ】

地球を三度も危機から救ったロックマンこと星河スバル。そんなスバルも無事に6年生へ進級し平和に過ごす、その裏で新たな驚異が地球を狙っていた

## 第0話 動き出した陰謀

ある場所のノイズウェーブに居る数体の電波人間たちが話し合っていた。

その中のリーダーらしい黒い体の電波体が

「イレイザー、クリムゾン・ドラゴンとラ・ムーの復元状況はどうなっている？」

と銀色の羽根に赤い体の電波体に聞くと、ディスプレイ画面のようなものを表示して

「今のところ順調ですが、何分2体のデータが少なく、復元に必要なクリムゾンの量が少ないの本物のような力が出せないかと」と説明した。

そして、「ふん、そんなことは分かっている。だからこそアレが必要なのだ！グレイ、アトラスそちらの搜索状況はどうなっている」

と聞くと赤い腕に黒い体の電波体が

「俺の方は収穫なしだ」というと、次に黒い羽根に白い体の電波体が

「こちらは、グリーン・フィールドに2つあることが分かりましたが、あまりに広い場所なので搜索が難航しています」が難しい顔をして言つと

「そうか。ならばグレイはアトラスと合流し、アトラスを手伝え」

「了解」

「あとは、目障りなWAXAとロックマンだ」と言つとシルクハットをした電波体が出てきて

「ロックマンは、私に任せてもらえないだろうか」と自信ありげに言つと

「いいだろう。ファントム・ブラック、貴様がロックマンを始末しろ！」

「ありがたい。これでやっとロックマンに復讐することができる」

「スレッドとクライブは、我と共に各国WAXAを叩いく!!!以上

だ。全員それぞれの持ち場に付け！！」

と言いつと、全員がノイズウェーブから姿を消した。

## 第1話 いつもと変わらない朝

『おい、スバル何時まで寝てるんだ。いい加減に起きやがれ!』

いつもの様にウォーロックがスバルを起こそうとしているが、スバルは、

「もうちょっと寝かせてよロッキー」と寝ぼけた言い方に、

ウォーロックがキレて、スバルの耳元で『いい加減に寝ぼけてないで起きやがれ〜!』

と部屋中に響くぐらいの大声で言った。

すると、スバルがびっくりしてベッドから跳ね起きるなりウォーロックを見て

「耳元で、そんな大声を出さないでよウォーロック」

『お前がいつまでも寝てるからだ。それにこういう起こし方が効果的みたいだから

今度からこういう風に起こしてやる』そう言われスバルは、

「いや、それだけは勘弁してよ。心臓に悪いから」

『だったら、今度からまとも起きるんだな』

いつもと変わらないスバルとウォーロックの会話をしていると下からスバルの母が

「スバル、起きたのなら早く顔を洗って、ご飯食べちゃいなさい」

「はい。今行くよー」と言うとスバルは、着替えて洗面台で顔をあらいリビングに向かった。

リビングについたスバルは、ご飯の用意をしているあかねに

「あれ、父さんは？」

「今日は、早朝会議があるから朝早く仕事に行っただわよ」

「ふーん、そうなんだ」とご飯を食べながら言った。

朝食が食べ終わると、スバルは2階に上がり学校に行く支度をしていたら

ピンポン

とチャイムが鳴り、玄関から

「おーい、スバル早く学校行くぞ」

「スバル君、早く行きましょう」

「星河君、早くしないと遅刻するわよ」

と三人の声が聞こえ、カバンを持って部屋から出て、玄関に向かうと

「母さん、行ってきます」

「行ってらっしゃい」

と言い合って外にいる委員長たちと学校に向かった。

## 第2話 放課後の予定

いつもと変わらない午前の授業も終わり、教室で昼食を食べたあと、委員長、キザマロ、ゴンタ、スバルの4人は、今日の放課後、何をするか話し合っていた。

最初に切り出してきたのは、ハンターをいじっていたキザマロだった

「今日の夕方、響ミソラのライブがこの近くであるらしいですよ」

「それほんと！それじゃあ放課後は響ミソラのライブをみんなで見に行くわよ」

「うおー、久しぶりにミソラちゃんの生の歌が聴けるぜ」

とノリノリで話し合っている三人に対してスバルは

（久しぶりにミソラちゃんに会えるなー。最後に会ったのいつだったかな）

と空を見ながら思うスバルにウォーロックがおちよくりにかかる

(なにぼーっとしているんだ？そんなにアイツに会えるのがうれしいのか？)

(そ・そんなんじゃないよ！)

と少し動揺しながらウォーロックに言い返すスバルだったが

「ちょっと星河君、ちゃんと話聞いているの？」

「そうだが、せっかくミソラちゃんのライブの話をしてるって言うのよー」

「そうですよ、スバル君もちゃんと話に参加してください」

「ごめんごめん、ちょっと考え事してて」

とスバルも会話に参加しようとしたとき

キーーンコーン・カーコーン

と昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

「仕方ないわね。じゃあ放課後集まってミソラちゃんのライブ会場に行きましょう」

「そっだね」

「分かりました」

「おう」

と委員長に返事をする三人

そして、真面目に午後の授業を受けるキザマロ・委員長

本を立てて居眠りをするゴンタ・空ばかり見て授業に集中していないスバル

そんな感じで午後の授業が終わり、帰りのホームになり、育田が教室に入ってきて

「え、今から修学旅行の班決めをしたいところだが、明日このクラスに転校生が数名来ることになったので、

明日、転校生が来てから決めることにした、というわけだ、後は頼むぞ委員長」

と言って育田は教室から出ていき、委員長が

「起立、礼」の言葉のあと「さようなら」と全員が言うと、

「明日来る、転校生ってどんな子だろう」

と明日来る転校生のことを噂しながら教室から出ていくクラスメイト達。

そして、委員長、キザマロ、ゴンタ、スバルの四人も明日の転校生のことは気にしていたが、今は、ミソラのライブを聴きに行くことで頭がいっぱいだったので、下駄箱で靴に履き替えてライブのある会場へ向かった。

### 第3話 ライブ会場での出来事

学校を出てライブ会場へ向かうスバルたち四人

その先頭を早歩きで行く、委員長、キザマロ、ゴンタの三人は、後方をマイペースに行くスバルに

「もうちょっと早く歩けないの星河君、早くしないと良い場所が他の観客に取られちゃうでしょ」

「そうですね、ですから早く来てくださいよスバル君」

「そうだが、早くしないとミソラちゃんの歌が始まっちゃうだろ」

と急かす委員長たち三人に対しスバルは

「そんなに急かさなくても、まだライブが始まる時間までかなりあるのに」と言い返すと、

「星川君、あなたは私たちの話が聞こえてなかったのから」と不気味に微笑み

ながら言う委員長長の横で

(ぜってえー今、怒ってるな、委員長)

(触らぬ神にタタリなしと言いますから、僕たちは、これ以上刺激しないようにしましょう)

(だな)

とキザマロとゴンタが小声で話しながら委員長の様子を見ていると

「い、いえ聞こえてました」とスバルが恐る恐る言い返すと

「だったら、さっさと来なさい！」

と怒鳴り声をあげる委員長に

「は、はこ」

と言って走り出すスバルに

『やっぱり、あいつは苦手か』

とハンターから出てきて話しかけるウォーロックに

「まあ、苦手と言えば苦手なんだけど、委員長も僕の大切なブラザーの一人だから」というスバルに

『だけど一番、大切なのはミソラじゃねえのか』とウォーロックに言われ顔が赤くなりながら

「か、からかわないですよウォーロック、それに会場では勝手に出てこないですよ」と言ってウィザードをOFFにした。

そして、委員長たちと一緒に、ライブ会場へ急いだ。ライブ会場に着くなり、委員長が

「私が、受付をしておくから、あなた達は場所の確保してきてちょうだい」

と言われ、スバルたちは、領いて場所取りをするため観客席に向かった。だが観客席は既に大勢のファンでいっぱいだった。

それでも何とか席を見つけだそうとに探すスバルとキザマロにゴンタが

「あそこ空いているみたいだぜ」

と言うゴンタについて行くと運よく四人分の席が有った。

するとキザマロが委員長に席の場所をメールで知らせ、スバルたちは、ライブが始まるまで席に座り喋りながら待っていると、受付を済ませた委員長がやってきて

「よく、この大勢のファンの人の中から四人分の席を見つけられたわね」

と聞くとキザマロとスバルが

「ゴンタ君のおかげです」

「ゴンタがここを見つけてくれたんだ」

と言うと委員長が

「そうだったの。でかしたわよ、ゴンタ」と委員長に褒められ

「なんか照れるな」

と顔を赤くしながらゴンタ言うと

『おいスバル』

とウォーロックがいきなりハンターから話しかけてたので仕方なくスバルは、

「ごめんちょっと化粧室に行ってくる」

と言って席を立ち、人目のつかない所に行き、ウィザードをONにして

「どうしたのウォーロック？いきなり話しかけてきて」と聞くと

『電話だ』

と言われ電話に出るスバルだが、エアディスプレイに映し出された相手に驚く

「み・ミソラちゃん」

「ヤッホー、スバル君久しぶり」

「う・うん。久しぶり」

「あのね、今日私のライブがあるんだ、それで今日のライブ見に来てくれる？」

「その事だったら大丈夫だよ、今そのライブ会場にいるよ」

「ホント、じゃあライブが終わったら会えないかな」

「別に予定もないから大丈夫だよ」

「じゃあ、会場の近くの公園の噴水の前で待ち合わせしよ」

「うん、ライブ頑張ってね」

「ありがとう」

そして、ミソラとの電話が終わり、委員長たちのもとに戻るうとしたスバルにウォーロックが

『良かったな、ミソラと話ができて』と言うウォーロックに

「からかわないですよ」少し顔を赤くしながらウォーロックに言いうと

『スバル、顔が赤いぞスバル』

と今度は、にやけながら言うウォーロックに

「あ、もうこんな時間だ、急いで戻らないと」

と話をそらし、ウィザードをOFFにして委員長たちのいる席に急ぐスバル。そして席に着こうとしたときに

「ずいぶんと長かったわね」と少し機嫌が悪そうに言う委員長にスバルは、

「道が混んでいたから」

と言いつつ、ミソラが登場したその瞬間、観客席から

「ミ・ソ・ラ」のコールと大歓声が会場全体に響き渡った後にミソラのライブが始まった。

#### 第4話 あとを追いかける者たち

ミソラのライブが終わり、スバルたちはライブ会場の外に出ていた。

「やっぱり、ミソラちゃんの歌はいつ聴いても最高だぜ！」

「そうですね。でもこれからどうします？まだ午後3時過ぎですか  
ら、どうしましょうか？」

「そうね。帰るにしてもまだ時間があるから、これからみんなでどこか出かけましょうか」

と切り出す委員長にスバルは、ミソラとの約束を思い出し

「ゴメン、僕これから用事があるからここで別れるね」

と言うとミソラと待ち合わせをしている公園の噴水へ走っていた。  
そんなスバルを見て

「スバルのやつ、せっかくの委員長の誘いを断るなんて」

「そうですね。でも珍しいですね、なにか予定があるのでしょうか？」

とスバルの愚痴を言うゴンタと不思議そうに言うキザマロの二人に

「怪しいわね」と疑う委員長は

「キザマロ・ゴンタ後を追うわよ」と命令する委員長にゴンタが

「でもこれからどっか行くんじゃない」とゴンタが質問した瞬間、委員長から怒りのオーラが出てきて

「後を追うわよ」ともう一度同じことと言う委員長に

「は、はい」

と脅えながら二人は答え、ライブ会場周辺を三人で手分けして探した。

「駄目です。委員長、どこにもスバル君がいません」と弱気なキザマロに

「キザマロ！弱音を吐く暇があるなら、人に聞くなりしなさいよ！」

と怒鳴りつけるようにキザマロに命令する委員長に

「は、はい」

と再び脅えながら答えると、周辺の人にスバルのことを聞くが誰も見ていないと答え三人があきらめかけていると

「そつだ、ペディアに探してもらえば」というキザマロの言葉に委員長が

「どつして、最初からペディアに捜させようとしなかったのよ！」

と怒鳴り声をあげた瞬間、周りにいた人が少し脅えていた。

そして、脅えながら、ペディアをハンターから呼び出しスバルを捜索させるキザマロ。

数分後 ペディアが

『見つめましたよ、キザマロ君』

と言うペディアにスバルのことを聞こうとするキザマロよりも先に  
委員長が

「それで星河君は、今、何処に居るのかしら」と委員長が聞くと

『この近くの公園から彼のハンターの反応があります』とペディア  
に聞いて委員長は

「何してるの行くわよ」と言われてキザマロは急いでペディアをハ  
ンターに戻し

ゴンタと一緒に委員長の後を追いつけて行く

## 公園

その頃スバルは、待ち合わせの噴水の前に先に来ていたミソラと合流し

「ゴメン、待たせちゃった？」とミソラに謝るスバルに

「ううん、私もさっき着いたところだったから」

と優しく微笑みながら言うミソラにスバルは、頬を少し赤くしながら

「と…とりあえず、これからどっしりする…どこか行く？」

とスバル聞かれミソラが

「うん、じゃあココ行ってみない」とパンフレットを見せながら  
言う

「ココ知ってる。この前テレビで宣伝していた遊園地だね。でも、  
この遊園地って外国だよ。今から行ってもあまり遊べないんじゃない？」とスバルが言う

「それなら大丈夫だよ。遊園地は、ついだから」とミソラが言う

「っえ！ほかに何かあるの？」

「うん、今日の夜、流星群が見れるって会場のスタッフの人から聞いたの。それで、スバル君に見せたかったの。それに場所もこの遊園地の近くだったから、時間まで遊んでいようかって思って」と顔を赤くしながら言うミソラに

「そうだった。ありがとうミソラちゃん」

「どづいたしまして じゃあ、早速電波変換していいんか」という  
ミソラの言葉に

『電波変換は、そんなことのためにあるんじゃないぞ』と機嫌を  
悪くしながらウォーロックが言うと

「お願い、ロック君」

『固いこと言わないでやってあげなさいよ』

「頼むよ、ウォーロック」とミソラ・ハープ・スバルの三人に説得  
されたウォーロックが

『じゃあ、今度好きなだけ暴れさせてくれるんなら、電波変換して  
やっても良いぞ』とニヤニヤしながらスバルに要求すると

「程々にしてよ」としづしが要求を了承すると

「よっしゃ〜」と声を上げて喜ぶウォーロック。そして、ミソラが  
スバルの手を握りながら

「これで、ロック君の許可も下りたから、スバル君行こうか」

「うん」

と頷いたあと、二人は人目のつかない所で電波変換をし、ウェーブロードに乗って、パンフレットにあった遊園地を目指した。

だが、そんな二人の様子を遠くのビルの屋上から見ていた黒い電波体が居た

「やっと、見つけたぞ！」

と呟くと、黒い電波体もウェーブロードに乗り二人の後を追いかけて行った。

## 第5話 正体と波乱の予感

二人が電波変換して遊園地に向かったすぐ後に委員長たち公園に到着し、スバルを捜すがどこにもいないことに腹を立てながら

「キザマロ！何処にも星河君がいないじゃない！！」と怒鳴り散らす委員長にキザマロは

「今、ペディアに捜してもらいます」と言っとハンターから再びペディアを呼びスバルの行方を捜した。

そして『キザマロ君、彼を見つけました。ですが高速で移動をしているようなので正確な位置は特定できません』

とペディアが報告するとキザマロが「委員長、これ以上の追跡は、不可能なんじゃ」と委員長に聞くと

「何言ってるの、私やあなたは、無理でもゴンタがいるじゃないの」とゴンタの方を向いて喋る委員長に

「そういうことですか」とキザマロも委員長の考えを理解し、まだよく分かっていないゴンタに

「委員長は、ゴンタ君が電波変換をして、追いかけると言っているんですよ」というキザマロの説明でようやく理解したゴンタが

「キザマロのおかげで、委員長の言いたいことは分かったんだけど、今、電波変換できないんだ」の言葉に腹を立てる委員長が

「何で、できないのよ!」と言うと

「昨日、家でオックスと牛丼を食べていたら見たこともない羽根の生えた電波ウイルスが外で暴れていたから俺とオックスが電波変換してやつつけようとしたんだけど、意外にそいつが手ごわくて、苦戦したけど、何とか倒すことができたのは良かったけど、オックスがかなりダメージを負って、苦しそうだったからアマケンで見てもらっているんだ」とゴンタが訳を言うとキザマロが

「委員長、ゴンタ君が電波変換できない以上、追跡は無理なんじゃ」と委員長に聞くと

「仕方がないわね。今日のところは諦めて帰るわよ!」と言って帰りだす委員長の後ろで

キザマロとゴンタが小声で

(明日、絶対スバルに聞くな)

(ええ、多分聞きますね)と喋っていると

先に行っている委員長が「早く来なさい！おいて行くわよ」と二人に言いつつ

「待ってください」

「待ってくれー」

と言いながらキザマロとゴンタは、委員長を追いかけて行った

## グリーン・フィールド上空のウェーブロード

ウェーブロードで、遊園地に向かっていく途中、ミソラがウェーブロードからのグリーン・フィールドの景色を見て

「見て、見て、スバル君。下の景色がすごく綺麗だよ」と言つと

「本当だあ、すごく綺麗な景色だね。じゃあ、少し降りて歩かない？」

とミソラに尋ねると

「うん、良いよ」

と微笑みながら返事をして二人がウェーブロードから降りようとし

た瞬間、

『スバル、気を付ける！後ろから何か来る』

『何かはわからないけど、ミソラも気お付けて』とウォーロックとハーブが

二人に呼びかけると、ウェーブロードから降りるのやめ、二人が後ろを振り向くと、そこには、ファントム・ブラックがいた

すると、ウォーロックがファントム・ブラックを見て

『アイツ前に戦った時よりすげえ殺気だ、気を付けるスバル！』

というときスバルは、静かに頷き、ウェーブロードからグリーン・フィールドを見て

「ここで戦えば、下にいる人たちに迷惑がかかってしまう」と呟くと

「そうだ！スバル君、アイツをあつ岩山に誘い込めればいいんじゃない」とミソラが言うと

「そうだね」とスバルが返事をする

「別れの挨拶は、済んだかな」

とファントム・ブラックが挑発的に言うと

『テメエなんかにおれたちが倒されるわけねえだろ!』

とウォーロックが言い返すと

「ならば、行くぞ!」

と言いながらファントム・ブラックが二人に向かって突っ込んでくるが二人は、かわすふりをして岩山の方に向かうと

「逃がしはしない」

と言って二人のあとを追う

グリーン・フィールド

「行ったな」とアトラスが言うと

「ファントム・ブラックの野郎、俺たちがここにいること知ってて、戦いを始めようとしやがって！」

とグレイが怒鳴っていると「喋っていないで、体を動かせ！この広いグリーン・フィールドの何処かにアレは有るんだぞ」とアトラスが言つと

「言われなくても分かっているけどよ、ホントにこんな所に有るのかよ。それにお前から渡されたこの探知機、壊れてんじゃないのか？」

と疑うグレイにアトラスは探知機を操作しながら

「疑い深い奴だ。ここに着いた時、一緒に調べただろう。微弱な反応が、このグリーン・フィールドの何処に……ツム？」

と言つアトラスの言葉にグレイが

「どつした？」と尋ねると

「いや、アレの反応が来た時より強くなっている」と驚いて言つアトラスに

「どつしたとだよ」と聞き返すと

「おそらく、何かに反応して強くなったんだと思うんだが、反応している場所に問題が……」と気になる言い方をするアトラスにグレイがキレ

「だあ〜！じれったい言い方してないで反応は何処なんだよ〜！」と怒鳴ると

「どうも、ファントム・ブラック達が行った岩山から反応がでてい  
る」

とアトラスが言った瞬間

「なに〜！〜！」

と叫ぶグレイにアトラスが

「とにかく、私たちも岩山に向かうぞ」

と言うとウェーブロードに乗ってファントム・ブラック達の居る岩山にアトラスとグレイも向かって行った

## 第6話 脅威！ファントム・ブラックの力

スバルとミソラは、グリーン・フィールドにいた人たちに迷惑をか  
けないようするために少し離れた岩山にファントム・ブラックを誘  
い込むと

二人は、ウェーブロードから降り、バスターとギターを構える、そ  
れを見たファントム・ブラックが

「そうか、ここが貴様らの選んだ死に場所か」

と自信満々に言いながらファントム・ブラックもウェーブロード  
から降りた。

『その減らず口をたたけなくしてやる、やるぞスバル！』

とウォーロックが言いとスバルは

「分かった」と頷き、

「援護を頼むよ、ハープ・ノート」

「任せて、ロックマン」と言って、ファントム・ブラックに先制攻撃を仕掛けようしたとき

「見せてやる、お前たちへの復讐のために手に入れた私の力を」

とファントム・ブラックは、マントの中から結晶のようなものを取り出すと

その結晶から黒い光が出てきて、ファントム・ブラックを包んでいく。そんな姿に見とれてしまう二人に

『何していやがる！今のうち攻撃しやがれ』

『ウォーロックの言う通りよ。アイツさつきより嫌な感じがするわ』

とウォーロック、ハーブに言われ正気に戻ると

「バトルカード・ヘビーキャノン！」

と声はもり、二人の腕が武器へと変わり、

ファントム・ブラック目掛けて放つ。攻撃はファントム・ブラックに直撃し、辺り一帯、爆発で起きた煙で覆われた。だがその煙の中で不気味な笑い声が聞こえた。

「そんな、直撃だったんだよ」

「うん。変な光に包まれかけていたけど、確かに直撃していたはずなのに。笑っていられるわけが…」

と二人が笑い声に驚いていると、煙がはれていき、そこに居たのは、さっきまでのファントム・ブラックの姿ではなかった

まるで死神のような姿で手にはステッキではなく大きな鎌を持っていた

そんな姿に驚いて唾然とするスバル達に「これが、お前たちに復讐するために手に入れた力、ファントム・ブラック・デスサイズだ」と言つと

『スバル、俺たちもファイナライズだ！』とウォーロックが言つとスバルは頷くと体の周りをノイズが包み込み

そのノイズの中で「ファイナライズ、ブラック・エース！」と叫ぶと

ロックマンの姿がブラックエースになると「ハーブ・ノート、少し離れてて」と頼むと

「私も戦うよ」

「ダメだよ！今のファントム・ブラックが相手じゃ、ミソラちゃんが危険だよ」とミソラのこと心配をすると

「でも……分かった、でも無理しないでね」と心配そうに言うミソラにスバルは

「うん、約束するよ」と聞くとハーブ・ノートはロックマンから少し離れた岩山に移動した。

そして、ロックマンもハーブ・ノートが離れたの確認するとファントム・ブラックの方を向いて

「行くぞ！！ウェーブバトル！ライド・オン！！」と言って二人の戦闘が始まった。



## 岩山

その頃、グレイとアトラスも岩山に到着し、到着早々周辺の探索をするアトラスとロックマン達三人が戦っている岩山から少し離れた岩陰から様子を面白そうに見ているグレイが

「あいつら、本気でやり合っみたいだぜ！そっちは、見つかったか。アトラス？」と探索中のアトラスに話しかけると

「ああ、見つけた。」と少し不機嫌そうに言う。それを聞いたグレイは、アトラスのもとへ一目散に行くと

「それで、どこなんだ？」

「この岩壁の向こうだ。反応が一番強いから、間違いないだろう」

と普通に言っているが内心、何もしないで、ファントム・ブラックたちの戦いを見ていたグレイに

(この役立たずとは、二度と作戦行動を共にしたくないな)

と思っていると、「それじゃあ、さつさと、この岩壁を吹き飛ばすか！」と周りの状況に無関心な発言をし、構えるグレイにアトラスがキレた。

「この脳なし・単細胞！！少しは、周りの状況を見てから考えることはできないのかああ！！！」と叫びながらグレイを蹴り飛ばした。

あまりに突然のことだったため、防御が間に合わずにグレイは、岩壁にめり込んだ。アトラスは、グレイを蹴り飛ばしたおかげで冷静さを取り戻し、

グレイを岩壁から引き抜こうと岩に近づこうとした時、グレイが自力で岩壁から抜け出てきた。

そして、アトラスに蹴り飛ばされたことに腹を立てたグレイがアトラスにやり返そうと近づいた瞬間、グレイがめり込んでいた岩壁が

崩れていく。

すると崩れた岩壁の後ろに遺跡の入り口のようなものが現れ、グレイとアトラスは、啞然とした。そして、正気に戻ったグレイが遺跡の中に入るう入り口に向かっているのを見て

「さっき、私に何かしようとしたんじゃないのか？」とアトラスが聞くと

「なんのことだ？」と遺跡が現れた、おかげでグレイの怒りがいつの間にか治まっていることに

(コイツ、さっき私に蹴られたこと忘れている。単純というか馬鹿と言うか……)と小声で呟いていると

「何してんだ、さっさと行くぞ！」と入口の前から叫ぶグレイに

「そんなに叫ばなくても、今行く」と言っただけグレイのもとへ行き遺跡の中に入って行った。

第7話 新しい力（前編）（前書き）

久しぶりの更新で気合入れすぎて、文章が長くなってしまいました。

## 第7話 新しい力（前編）

謎の結晶から出た黒い光でパワーアップしたファントム・ブラックは、ファイナライズ状態のロックマン（ブラック・エース）と睨み合っていた。

その状況は、いつ戦いが始まってもおかしくない、緊迫した状態だった。しばらく見ら見合っていたが、しびれを切らしたファントム・ブラックが

「こちらから、仕掛けさせてもらっぞ！」と突っ込んでくる。

スバルもロックバスターで応戦するがファントム・ブラックは、それを簡単にかわし、スバルを斬りかかろうと鎌を振り下ろす。

「バトルカード・ブレイクサーベル」

ロックマンも腕をブレイクサーベルに変化させ、ファントム・ブラックの鎌を防ぐ

「それで防いだつもりか」とファントム・ブラックは、ブレイクサーベルを徐々に押し返していく。

「バトルカード・マッドバルカン」

もう片方の腕をマッドバルカン変え攻撃した。攻撃は、鎌の隙間からファントム・ブラックの腹部に全弾命中すると

『よし、今だ！スバル押し返せ！！』とウォーロックの掛け声で力が入らなくなったファントム・ブラックの鎌を押し返し、そのままブレイクサーベルで斬り付けた。

斬りつけられたファントム・ブラックは、「ちい」とその場に怯むと

『スバル！一気にたたみかけるぞ！！』

「うん！バトルカード・デストロイアッパー、ワイドウエーブ」

怯んでいるファントム・ブラックにデストロイアッパーがクリンヒットし、吹き飛ばすファントム・ブラック目掛けてワイドウエーブを放つ。そして水の刃に押されて後ろの岩にぶつかり、岩山が崩れる。

「今のは、効いたぞ。だが調子尽くのもここまでだ！！」と崩れた岩から飛び出し、先程とは、比べものにならないくらいスピードで突っ込んで来る。

スバルも何とか動きを止めようと

「バトルカード・スプレットガン」

左腕を変化させ、ファントム・ブラック目掛けて撃とうとした瞬間、

「遅い!!」

と背後からファントム・ブラックの音が聞こえ、振り向く前に鎌で斬られ、そのまま地面に倒れるロックマンに

「くらえ! デス・ファントム!!」

「うあああああ!!」

体から死神のような形をした影が出てきて、ロックマンを飲み込む。

そして、影から吐き出されて倒れるロックマンに

「まだ寝るのは、早いぞロックマン！デス・スレイブ」

鎌を大きく振り、そこから衝撃波が出てきて、倒れているロックマンに追撃を放つ。

ロックマンは、そのまま後ろの岩にぶつかり倒れてしまう。だが、ファントム・ブラックは、さらなる攻撃をしようと近づく。

『おい、スバル！しっかりしろ』

と叫ぶウォーロックの声で起き上がるが、すでにファントム・ブラックが鎌を振り下ろそうとしていた。

スバルも何とか立ち上がり

「バトルカード・ワイドソード・ロングソード」

両手をワイドソード、ロングソードに変え、ファントム・ブラックの鎌を受け止めるが

「そんな物で私の攻撃が防げるかな」とファントム・ブラックは鎌をもつ一度振り下ろす。

だが、先程の攻撃とは、比喩物にならないくらいの速度で何度も振り下ろしてくる。

スバルは両手のソードで何とか防いでいるが防ぐので精一杯で、ただファントム・ブラックの連続攻撃に耐えるしかなかった。

そんな光景を離れた場所からロックマンを見守っていたハーブ・ノートが

「スバル君！！」

と言って飛び出そうとした時

『ダメよ、ミソラ！今、私たちが出て行っても、彼に負担がかかるだけよ』ハーブがロックマンのもとへ行くのを止める。

「分かってるよ…でも、このままじゃ…スバル君が」

『止めてもだめそうね。助けに行くわよミソラ！』

「うん」

ハーブを説得し、再びロックマンのもとへ飛び出そうとした時、何処からともなく光が飛んできて、ハーブ・ノートを包み込む。ハーブ・ノートは、突然のことだったため、目をつぶっていた。

「……」

目をあけて、辺りを見渡していると、

“強きキズナで結ばれし者よ”

「!?!?…誰!」

突然の聞こえた声にハーブ・ノートは、驚いて声を上げると

“驚かせて済まない。我は星の民と呼ばれる一族のものだ!”

声とともに目の前に光の玉が現れた。

「その星の民が、私たちをこんな所に閉じ込めたの?」

“閉じ込めたわけではない。つがこの状況で、こんなことを言っても説得力はないが信じてほしい”

「信じてほしかったら姿を現したらどうなの？それに私、今急いでいるの」

“まあ待て。この空間に居る間は、時間の進みが違うから安心しろ！それより、お主に頼みたいことがあるのだ。”

「頼みたいこと？」

“そうだ。我と波長が似ているお主にしか任せられないことだ！まずはこれを”そう言う”とハーブ・ノートの前に光る結晶のようなものが現れた。

「きれいな結晶」

『ミソラ、この結晶、かなりの力を秘めているわよ』

「そうなの！この結晶はいったい何？」

“すまないがその結晶をつかんでくれないか”

(って聞いてないし)

ハーブが心の中で突っ込んでいると

「この結晶を掴めばいいの。」

ミソラがは星の民に言われたとおり結晶を掴むと結晶が吸い込まれるかの様にハーブ・ノートに取り込まれた。

すると、ハーブ・ノートの体が急に光出した。

「私どうしちゃったんだろう。急に体が光出したと思ったら、体中に力が湧いてくるみたい。」

『そうね。それになんだか心地良い感じがするわ』

「一体これは何なの？」

“それは星が持つ力の結晶、プラネットフォースだ!!!”

「プラネットフォース？」

“そつだ。それとこれも主に渡しておく”

星の民がそつ言うつとリングのようなものがハーブ・ノートのもとへ飛んできた。

「これは？」

“それは、星の証というものだ。それを持ってしていると他の証を持っている者とを引き合わせる力がある。その証は、これから必ず役に立つ時が来るからなるものだから持っていてくれ。”

「それどういう意味なの？それに、どうして私達にプラネットフォースや証を託したりするの？」

『そつね。こんな空間を作れるほどの力を持っているんだから私たちに託さなくても自分で使えばいいんじゃないの？』

“それは無理なのだ。我は、主のようにプラネットフォースと完全に一体になることができなかつた。それに、我の肉体は、ある者との戦いで滅んでしまっている。いわば魂の状態なのだ。”

「魂……つてことは、あなたは……ゆ……幽霊……！」

“まあ、主たちにとってはそういうことになる。さて、話を本題に戻すが、今主の仲間が戦っている者から、昔、我ら星の民たちが束になってもかなわず、封印するのがやっとだった奴に似た波長を感じる。それに、奴の禍々しい波長も少しではあるが感じ取れる。おそらく奴の封印を解き放とうとしている者のしわざだろう。ゆえに、プラネットフォースを主に託した。奴を再び封印するや倒してほしいからだ。”

「そんなことできるわけないよ。あなたが封印するのでやっとだった相手を倒すことなんてできるわけないよ。」

“だが、我には主以上にプラネットフォースを使いこなせる者を捜す時間は、もう……うう。”

急に光の輝きが弱まり

「ちょ……ちよっと、大丈夫なの？」

心配そうに尋ねるハーブ・ノートに

“すまない、どうやら私も眠りに就く時が来たようだ。頼む…奴から…星を守って…くれ”

そう言うと光は消え、周りの空間がまばゆ光放ち、光が弱まったと思つとハープ・ノートは元の場所に立っていた。

「今は夢だったのかな」

『どうやら、夢じゃなそうよ』

「っえ！」ハープに言われ全身をまとう光に気付く。

「やっぱり、さっきのことは夢じゃなかったんだ。」

『そんなことよりミソラ、早くロックマンのところへ急ぎませしよ』

「そうだった。待っていてロックマン。今、助けに行くからね」

そう言うとハープ・ノートは、ロックマンのもとへ飛んで行った。

## 遺跡

ミソラがロックマンのものに飛んで行く数分前

グレイとアトラスは、偶然見つけた遺跡の中を探索していると、急に奥から光が見え

「なんだあの光は？出口の光か？」

「いや、アレは出口の光じゃないぞ！…光の玉のようなものがどんどん近付いてくる！」

「おもしれえー。トラップだな。俺が叩き潰してやる！」

と向かってくる光に攻撃をしようと構えるグレイに「止める！」と手を出して止めようとするアトラス。

だが、グレイは、その手を振り払い、再び構える。見兼ねたアトラスは

「いい加減にしろおー!!」

と叫び、グレイを地面に押し倒してそのまま体の上に足を乗せた。

そのあと光は、アトラス、グレイを傍を通り過ぎていく。

アトラスは、通り過ぎた光を見て「まさか、あの光の玉はもしかすると……」

と疑問を抱いていると、足もとから「おい、いつになったらこの足を退けてくれるんだ！」

地面に押し付けられながら言うグレイに「ああ、すまない。」と言って足を退けると

「何で、あの光の玉に攻撃したらいけねえーんだ！」

と言って突っ掛かるグレイに厭きた表情で「お前が、こんな所で攻撃したら、遺跡そのものが崩れてしまっただろうが！」

「崩れないように加減するくらい俺にもできる」

「いや、加減しても無理だ！」

「何でだよー！」

「お前がどう加減しても、遺跡自体が脆いから少しの爆風でも、崩れる可能性が高い！それよりも、グレイは、あの光を追え！」

「何だよ、いきなり！ただのトラップだったんじゃないのか？」

「いいから、追えー！」

「ハイハイ。んでアトラスお前は、どうするんだよ？」

「俺は、このまま遺跡の中を調べる。気になることがあるからだ」とアトラスだけ遺跡に残ることに不満そうな顔をするグレイに

「もしかすると、あの光は、俺たちが捜しているものかも知れない。もし、アレがロックマン達の手に渡り、覚醒してしまったら、俺たちの苦労が無駄になってしまう。それどころか、今ロックマンと闘っているファントム・ブラックがやられてしまう可能性もあるんだ。今ファントム・ブラックがやられることは俺たちの計画に支障が出る。その前に、おまえがあの光を回収して欲しいんだ！」

と言うとグレイは、先ほどまでの不満顔から真顔に変わり

「そこまで頼られた行くしかないな！安心しろアトラス！俺が必ずあの光を回収してきてみせる！」と言ってグレイは、光の飛んで行った方へ向かった。

（やはり単純だな、扱いやすい。だが、アイツがロックマンの手にあの光が渡るまでに回収しなければ、本当に厄介なことになる。それに……）

グレイが行った後、愚痴を呟きながら遺跡の奥へと行った。

「簡単に引き受けてしまったが……どう考えてもあの光を完全に見

失ったな。遺跡の外に出たのは確かなんだが……」

グレイが遺跡の外で光を見失い、遺跡の周辺を捜していると離れた岩山からハーブ・ノートがロックマン達が戦っている方に飛んで行くのが見え

（まさか！！）と慌てた表情でグレイもロックマン達の方へ向って行った。

第7話 新しい力（前編）（後書き）

感想待ってます。

## 第8話 新しい力（中編）

ファントム・ブラックの鎌攻撃に為す術なく、攻撃に耐えているロックマンだったが、それまでに蓄積されたダメージで体力の限界だったのか体制を少し崩してしまふ。

すかさずファントム・ブラックが両手のソードを振り払い

「トドメだあー!!」

とトドメの一撃を振り下ろそうとした瞬間、音符がファントム・ブラックの鎌に命中し、鎌を弾くと

「今の攻撃は……まさか」

と鎌を弾いた攻撃に気を取られているスバルに

『そんなことより、今のうちに体勢を立て直して、反撃しろ!!』

「ハアハア」

と息を切らしながら体勢を立て直し、

「ギャラクシー・アドバンスー！インパクトキャノン！」

再び腕を変化させ、ファントム・ブラック目掛けて放とうとした瞬間、ファントム・ブラックはロックマンの背後に回り込み、両腕を封じる。両腕を封じられて、インパクトキャノンが打てないロックマンは、何とかしようともがくが、先ほどまでの受けてきたダメージで力が出し切れなかった。

そこへ光に包まれたハーブ・ノートが現れ

「ロックマンを放しなさい！ショックノート・フォルテッシモ！」

とハーブ・ノートの攻撃がファントム・ブラックに命中し力が入らなくなった鎌を振り払い、ロックマンはインパクトキャノンをつア  
ントム・ブラックの体に着けると

「やめろ！この距離で撃つたら貴様もただじゃ済まないぞ」

ファントム・ブラックは、命乞いのように言うがスバルは、それに構うことなく

「くられ！零距离インパクト・キャノン！！」

「やめろおおおおおおお！！！！」

と声とともに激しい爆発が起きる。

ロックマンは、反動で後ろに吹き飛ぶが、ハープ・ノートが受けとめ、その場から少し離れた岩山に連れて行き、心配そうな顔で

「スバル君、大丈夫？」と尋ねると

「な…なんとかね。でもどうして来たの？」

「スバル君が心配だったの」

「そうだったんだ、ゴメンね。心配かけちゃって」

「ううん。スバル君が無事でよかったよ」

「ありがとう。でも、さっきから気になってたんだけど…何でハープ・ノートの体が光ってるの？」

「それは……」「ミノラが理由を話そうとした時

『おい！アイツは、まだやられてねーんだから、そんなことしている場合か！！』

「「っえ！？」」

ウォーロックの呼びかけに二人は驚いて、ファントム・ブラックのいる岩山を覗くと、

「ハアハア」と息を切らしながら膝をついて立っているファントム・ブラックが見え

「あの距離からのインパクトキャノンでも倒せないなんて……」と驚いている二人に

「許さんぞ、貴様らぁあああ……！」

と叫ぶと周りから再び黒い光のようなものが出てきてファントム・ブラックの体を包んでいく。

『また変身する気か？スバル！これ以上あいつの好きにさせるんじやねーぞ！』

「うん」と頷くと

「私も行くわ、ロックマン」と言い出すミンラに

「危険だよ」と心配するスバルに

「今の私ならスバル君の足手纏いにはならないよ」

「分かった、一緒に行こう」

「うん」と頷いて、ロックマンとハーブ・ノートは、再び光に包まれてかけているファントムブラックに近付き、

「ショック・ノート」

ハーブ・ノートの傍からスピーカーが出現し、大量の音符がファントム・ブラック目掛けて放た。

そして、ファントム・ブラックに命中すると体を包んでいた光が徐々に取り除かれていくのを見て

「スゴイ！」

思わず見とれてしまうスバルに

『スバル！見とれていないで俺たちもアレをやるぞ！！』

とウォロックが言うと、ロックマンは飛び上がり、手のひらからブラックホールを出し、ファントム・ブラック目掛けて放つとブラックホールがファントム・ブラックを包むと

「ブラック・エンド・ギャラクシー」

掛け声とともにノイズでできた禍々しいソードでブラックホールごとファントム・ブラックを切り裂くと、もの凄い爆発と衝撃波が起こった。

技を放った後、ロックマンは、ファイナライズが解け、その場に倒れそうになるが、ハーブ・ノートが支え

「やったね スバル君」

「うん。でも、まだ安心できるか分からないけど」不安そうに言う口ツクマンに

「大丈夫だよ。今の私たちならなんとかなるよ」

「なんとかなるねー なんと良いな。まあ、ここからお前らが無事に帰れたらな！」

「「!？」」

突然の声に驚き、二人が辺りを見渡していると

「おいおい、どこ見ているんだよ。俺はここだぜ！」

とおちよくるかの様に、気絶したファントム・ブラックを抱えた電波人間が現れた。

『「デメエー何もんだ?どうして、そいつがそこに居る!」』

突然現れた電波体にウォーロックが喧嘩腰に質問すると、ファントム・ブラックを地面に放り、

「質問の多い奴だ！まずは、自己紹介でもするか。俺の名は、グレイ！ダークネスのグレイだ！！そして、コイツがここに居る理由は、助けたからに決まっているだろうが！！」

言い返すグレイにスバルが「そんな…確かにファントム・ブラックの手応えがあつたのに」

「ん？お前が切つたっていうのは、アレのことか？」と指をさしながら言うグレイに

スバル達がグレイの指の先を見て

「あ…アレは人形？」

「でもどうやって、あの状況からファントム・ブラックと入れ替えたんだ？」

「お前たちが知る必要はないね！なぜならここでお前たちを始末するからだ」グレイの挑発にウォーロックが

『やってみやがれ！おめえみたいなやつに俺たちがやられると思っているのか』

「その意気込みは気に入ったが、お前の相棒はどうかな」

『そりやどし……』

ウォーロックが言っている最中にスバルが息を切らしながら、膝を再び着く。

「コイツ（ファントム・ブラック）との戦闘で、お前の相棒は体力の限界みたいだな。まあ、そっちの方が楽に始末できるからな！」

と再びロックマン達を挑発すると

『なめやがってー！ー！』

（だが、やべーな。アイツの言うとおり、スバルの体もそろそろ限界だ！どうする……）

ウォーロックがグレイの挑発にキレるが内心かなり焦っていた。

「おっと！無駄話はここまでにして、そろそろお前たちを始末し始めないと、アイツに何言われるかわからないからな！」

と急に眼の色を変えて言うグレイに

「ハアハア……そう簡単にやられたりしないよ！」

と息を切らしながらも立ち上がり、バスターを構える。

「ほう。そんな状態で俺と闘おうって言うのか！面白い！」

余裕の表情で言うと、右手をロックマン達の方に向け

「メギド・フレイム！！！」

掛け声と同時に手から黒い炎がロックマン達目掛けて放たれた。

「炎属性の攻撃には水属性の攻撃だ」

「バトルカード・ワイドウェーブ」

ロックマンとハーブ・ノートは、腕を変化させ、二人同時に水の刃を放つと二つの水の刃が合わさり、より強力な水の刃となって、グレイの放った黒い炎を防ごうとするが、簡単に打ち消されてしまう。

「き…効かない！」

『驚いている場合か！避けるー!!』

ウォーロックの呼びかけで、ロックマンとハーブ・ノートはウェーブロードに飛び上がった後、黒い炎は、二人の居た岩山とその周りの岩を一瞬で焼けつくし、その岩を溶かしていった。

『なんちゆう火力だ！まともに食らっていたらヤバかったな』

ウォーロックが岩山の方を見て驚いていると

「おいおい、あの程度の攻撃ぐらい防いでくれよ！そうじゃないと俺が楽しめないだろうが!!」

「楽しむ？君は、戦いを楽しんでいるのか？」

「当たり前だ！俺は、戦いが楽しくてしょうがねーだよ！だが、お前たちとやっつけていても楽しめそうにないから一気に終わらせてやるよ！！」

と言ったあとグレイは、もの凄いスピードでロックマンとハープ・ノートのもとに近づく。

「ギャラクシーアドバンス！デストロイミサイルGA！」

ロックマンは、近づいてくるグレイ目掛けて12発のミサイルを放つ。だが、グレイは、向かってくるミサイルを避けようとせず

「この程度のミサイルなら、これで十分だ！フレア・ボム！！」

グレイは、掌から大量の炎の玉を出し、向かってくるミサイル目掛けて放った。すると、ミサイルとグレイの放った炎の玉がぶつかり、大爆発を起こした。

辺り一帯は爆発で巻き起こった煙で覆われ、煙の様子を窺っているスバルに『何ボサツとしてんだ！早く次の攻撃をしやがれ！やられるぞ！！』

「そんなこと言われなくても分かってるよ！でも……どこを狙ったら…」

「それなら、大丈夫だよ。アイツの位置は、分かるから私が攻撃したところを狙って」

「分かった。頼んだよ、ハープ・ノート」

「任せて！ショック・ノート！」ハープ・ノートが煙の中に音符を放つと

「バトルカード・プラズマガン！」

ロックマンは、腕を変化させて、ハープ・ノートが放った音符のところ目掛けて電撃を放った。そして、煙の中から電撃でマヒ状態のグレイが飛び出してきた。

だが、グレイは、マヒしているにもかかわらず、ロックマン達のもとへ再び突っ込もうとしていた。すかさず、

「バトルカード・バブルフック」

ロックマンは、泡でグレイの動きを封じるとロックマンとハープ・ノートが飛び出し

「バトルカード・ライメイザン！」

ロックマンの腕が変化すると

「バトルカード・スイゲツザン！」

ハープ・ノートも腕を変化させ、グレイに斬りかかった。斬られたグレイは、そのまま地面に落下して行った。

それを見ていたハープ・ノートが

「やったね ロック……」

ロックマンの方を向きながら言うが途中で言うのをやめてしまう。

先ほど地面に落下したはずのグレイがロックマンのすぐ後ろに居たからである。

「ロックマン後ろー！」

とっさにハーブ・ノートが、後ろのグレイに気づかせようと叫ぶが

「気付くのが遅れたな！まずは一匹、グレイブ・ナックル！」

炎をまとったグレイの拳がロックマンに直撃し、そのままウェーブロードから地面の間にできた裂け目に落ちて行く。

「ロックマンー！」

ハーブ・ノートが、慌ててロックマンのもとへ駆け寄ろうとするが、グレイが行く手を阻む

「そこを退いてー！」

「それはできない相談だな。なんせ次は、お前がやられる番だからな！まあ、おとなしくプラネットフォースを渡せば、命だけは助けてやってもいいがな……アハハハ」

そう言うとグレイは、笑いだした。

「許さない…」

「あん、なんか言ったか」

「あなただけは絶対に許さない!!」

ハーブ・ノートに感情に合わせるかのように体を覆っていた光も乱れだす。

「おもしれー！そういう言うことなら力づくでも奪い取るだけだ！」

と言ってグレイは、ハーブ・ノートに突っ込んでいった。

第8話 新しい力（中編）（後書き）

感想待っています。

## 第9話 新しい力（後編）

ハーブ・ノートは、突っ込んでくるグレイに「シヨック・ノート！  
！」大量の音符を放つ。

「おいおい、プラネットフォースの力は、そんなもんじゃねーだろ。  
…フレア・ボム！」

グレイは、掌から大量の火の玉を出し、音符と衝突し、激しい爆発  
が起こり、辺り一帯が爆煙で覆われた。

（ダメだわ。今のミソラじゃ、ただやられるだけだわ）そう思った  
ハーブは

『ミソラ、そんなに感情的にならないで！じゃないとアイツは、倒  
せないわ。』

「分かってるよ。でも、アイツが……スバル君を」

『彼なら無事よ！だから少し落ち着いて！』

「ハーブ、それ本当なの？スバル君は無事なのね？」

『ええ、彼とのブラザーも切れていないし、彼の波長も微かだけど感じるわ。』

ハーブの言葉を聞いて、少し落ち着きを取り戻し

「良かった。」

『安心するのは、まだ早いわよ。彼の波長が微かっことは、かなりのダメージを負って動ける状態じゃないってことよ』

「そうだった。だったらアイツを何とかしてスバル君を助けに行こう」

『やっといつものミソラに戻ってきたようね』

「ありがとうハーブ。じゃあ、いくよ」

『ええ！』

ちょうど二人の会話が終わると爆煙が晴れていき、余裕の表情で立っているグレイの姿が見えてくると

「お！やっとひそひそ話が終わったか。」

「どうして攻撃してこなかったの？」

「あん、そんなに早くやられたかったのか！だったらやってみよう  
…メギド・フレーム！」

グレイの手のひらから黒い炎のを放った。

「来た！」

ハープ・ノートは、すかさずウェーブロードから飛び降りて炎をか  
わし

「マシンガン・ストリング！」

ギターの弦を飛ばし、グレイの体に巻き付け、そのままグレイを地  
面に引きずり下ろすと巻き付けた弦をさらに強く巻きつけ

「ショック・ノート！」

音符を弦の上を走らせるかの様に放った。

「まだまだ……ショック・ノート！」

ハープ・ノートは、攻撃を止めず、さらに大量の音符をグレイ目掛けて放ち続けた。

グレイは、ハープ・ノートの攻撃をどうにかしようと足掻くがギター  
の弦は、切れず、さらに巻きつき、身動きが取りづらくなり、ハ  
ープ・ノートの連続攻撃をまともに受けていた。

『ミソラ、その調子よ！私たちの攻撃も少しずつだけど、アイツに  
聞いているみたいよ！でも、油断は禁物よ』

「分かってる」

そう言つとさらに音符をグレイ目掛けて放ち続けた。

「あんまり調子に乗るんじゃないー！ー！」

突然グレイが叫び声を上げ、全身から炎を出し、弦を焼き切り、全身の自由を取り戻したグレイは、再びハーブ・ノートのもとへ突進していった。

すかさずハーブ・ノートは、ウェーブロードに飛び上がり、

「バトルカード・マッドバルカン」

腕をマッド・バルカンに変え近づいてくるグレイ目掛けて攻撃するが、グレイは巧みに攻撃をかわし

「フレア・ボム！」

至近距離から炎の玉を放った。

ハーブ・ノートは、防御できず、まともに攻撃を受けウェーブロードから落ちてしまう。だが、グレイは、落下していくハーブ・ノートを捕まえ首に手をまわし

「さて、もう一度、選択肢をやるよ。このまま俺に絞殺されるか、おとなしくプラネットフォースを渡すか、好きな方を選べ！」

ハープ・ノートの首を締めながら言う。

「あ…アナタ…なんかに…渡しわ……しない」

「そうかい。だったら絞め殺すのはやめて一撃で楽にしてやるよ…  
…メギド……つつ！」

ハープ・ノートの返答を聞いた 그레이 が、黒い炎を出しながら手を近づけ、放とうとした瞬間、 그레이 の腕にビームが当たり

「誰だ?!」

攻撃をするのを止めビームが飛んできた方を振り向いた。

「て、テメエは」

그레이 は、撃った相手を見て驚いた。先ほど地面の裂け目に落ちたはずの ロックマン が立っていたからだ。しかも、ハープ・ノートと同様に光に包まれているのを見て

(おいおい、ウソだろ！アイツは、さっき倒したはずだぞ。それに

あいつの体を覆っている光は、まさか…だったら、まずは、この女を先に始末しねーとな)

グレイが、再びハーブ・ノートに攻撃を仕掛けようと手を近付ける。

「ハーブ・ノートは、やらせない!」

そう言うとロックマンはグレイのもとへ突撃する。

「今更、何をしても……」

グレイが余裕ぶって言っている最中にロックマンがグレイの傍まで接近し、体当たりをした。

グレイは、ロックマンの体当たりをくらい、ハーブ・ノートの首を絞めていた手を離してしまふ。ロックマンは、すかさずハーブ・ノートを抱き抱えて、グレイから離れる。

「大丈夫、ハーブ・ノート?」

心配そうな顔で尋ねるロックマンに「ゴホ…ゴホ…何とか…大丈夫だよ。助けてくれてありがとう、ロックマン。でも、その体を包ん

でいる光、私と同じってことは、ロックマンも…？」

「お前ら、あれで俺から逃げれたと思っているのか」

「「!？」」

二人が突然、聞こえた声に驚き、振り替えるとそこにグレイが立っていた。

「そんな…いつの間に近づいたんだ！全く気配すら感じなかったのに」

「知ってどうする？これから死ぬお前たちには、関係ねーだろ！」

グレイは、体から不気味なオーラのようなものを出し始めた。

『やべーぞ、スバル！あの野郎からとんでもねー力を感じる。』

ウォーロックがグレイの様子を見て言うと

「そこまでしておけ、グレイ！」

突然、声とともにグレイとロックマン達の前に白い体に黒い羽根を  
した電波人間が現れた。

「何しに来たんだよ、アトラス！」

グレイは、先ほどまでのオーラを解き、質問する。

「グレイ、ひとまずファントム・ブラックを連れて、一旦引くぞ！  
その程度の相手に本気を出す必要はない！」

「何でだよ！突然、出てきて退けだど！ふざけんじゃねーよ。これ  
から面白くなるところなんだから邪魔すんじゃねーよ」

「この命令が、あの御方の指示だとしても逆らうのか。」

「……ツチーわーったよ。退きやいいんだろ退きや！おめーら、命  
拾いたな！今日のところは、プラネットフォースは、諦めてやる。  
だが…コイツは、貰って行くぜ！！」

「あ、アレは、ムーメタル！…いつの間に…！」

『野郎、それを返しやがれ』

スバルとウォーロックが、 그레이の手の中のムーメタルに驚き、ムーメタルを取り返そうと飛び出す。だが、アトラスが行ってを阻み

「あまり奴らを挑発するな。お前は、早くファントム・ブラックを連れてここから離れる！」

「わーってる。だけどよ、お前はどつするんだ？」

「俺は、あの御方からもう一つの指示を受けている。だから、それを片付けてから行く。」

「なんだよ、まだなんかやることがあるのか？」

「ああ、この辺り一帯を消せという指示がな」

「へえー。この辺りを消すね……………って、それを先に言えっつてーの  
！！」

그레이は、アトラスの発言に驚き、急いでファントム・ブラックのもとへ行った。アトラスは、 그레이が言ったのを確認すると手を高

く上げ、

禍々しいまでのエネルギーが手のひらの一点に凝縮されていく。

「ここを消すですって!」

「そんな張つたり」

スバルとミソラがアトラスを見て言うと

『いや張つたりなんかじゃねー!あの野郎が集めているエネルギー量は尋常じゃねー。こりゃ、本当にこの辺りが消し飛んじまうかも知れねー』

『ウォーロックの言う通りよ!二人とも早くここから離れるのよ』

アトラスの手のひらに集まっていくエネルギーの量に危機感を感じたウォーロックとハープが、スバル達に逃げるよう呼びかける。二人は、急いでウェーブロードにのり、岩山から離れようと駆け出す。

「今更、逃げて遅い!この場所とともに消え去れ!ジエノサイド・クライシス!!」

手のひらに集められた禍々しいエネルギーの球体を地面に向け放った。そして、球体が地面にぶつかると、凝縮されたエネルギーが膨張し、辺り一帯を飲み込むエネルギーの渦が巻き起こった。

二人は、ウエーブロードに乗って逃げるが、すぐ後ろに迫るエネルギーの渦にウォーロックが

『おい、急げ！！アレにのまれたらひとたまりもねえぞ！』

「そんなこと言われても、これが精一杯なんだ。これ以上の加速は……」

「そうだ！スバル君ジェットアタックを使ってみたらどうかな」

「そうか！その手があった……いくよミソラちゃん！！」

「バトルカード・ジェットアタック」

二人は腕を変化させ、今よりさらに加速する。

だが、ロックマン達がバトルカードの効果で加速するがエネルギーの渦の飲み込むスピードがまだ早く

「ダメだ、飲み込まれる……」

「いやああああ」

二人が飲み込まれるのを覚悟した時

「お前ら、諦めるのは、まだ早いぜ!!」

突然、声とともにロックマン達の隣に飛んできた銀色の鎧にVの字のバイザー、背中に白い翼をした電波人間が姿を見せると

「お前ら、振り落とされないようしっかり掴まってるよ!」そう言う  
うと二人の体を掴み

「うわあああああ」

「きゃああああああ」

二人の叫び声とともにその場からものすごいスピードで飛び去って

行  
っ  
た。

第9話 新しい力（後編）（後書き）

感想・アドバイス待ってます。

第10話 約束（前書き）

久しぶりの更です。ちょっと長めにしました。

## 第10話 約束

### コダマタウンの展望台

「ここまで来りゃ大丈夫だろう。……おい、いつまでしがみついてんだ！」

「……」二人の返事が返ってこないことに不審に思った電波人間は、二人の顔を覗いて見ると

「ん？……気失ってやがる。仕方がねーな」

二人が気を失っていることに気づき、近くのベンチに二人を寝かせると二人は、電波変換が解け

「あとは、大丈夫だろう」

『おい、待ちやがれ!』

ウォーロックが、スバルのハンターから出てきて立ち去ろうとする電波人間を呼び止める。

「ん?何か用か?」

『あのエネルギーの渦から助けたことには、礼を言うが、なぜ、俺たちを助けた?お前は、いったい何者だ!』

「わりいな、今、理由を話してやる時間がない。だが、明日必ず話してやるよ」

そう言つて電波人間は、何処かへ飛び去つて行った。

『あの野郎……』

電波人間が飛んで行った方を見ながらブツブツ呟いていると

『いつまでも、そんなところでぶつぶつ言っていないで、こっちに  
来てスバル君でも起こしてあげたらどうなの。このままほっといた  
ら風邪をひかせちゃうでしょ!』

『ッケ！世話の掛かる奴だぜ』

ハーブに言われて、しびしびスバルの居るベンチに行く

『おい！スバル、起きろ！！』

「……………う、うん…ココは…あれ展望台？」

目を覚ましたスバルが体を起こし、辺りを見渡して言うと

『気がついたかスバル』

「ウォーロック、どうして僕たち展望台に居るの？確か…エネルギーの渦に飲み込まれそうになった時、何処からか電波人間が現れて、僕たちの体を掴まれたところまでは、覚えていたんだけど、気を失っちゃったからあの後、どうなったのウォーロック？それに、あの時現れた電波人間は、どこに居るの？」

とスバルが辺りを見渡しながらウォーロックに尋ねると

『あの後どうなったかなんて、俺にもわからねーし、ましてあの野郎のことなんかもつと知らねー!!』

ムスツとした表情で言うウォーロックにスバルは、顔を傾げて

「どうかしたの？」

『何でもねーよ』

(明らかに何かあったと思うけど)とウォーロックの態度を見て小声で呟いていると

『全く、しょうがないわね』

ミソラの傍に居たはずのハーブが近寄ってきて言うと

『何しに気やがった!!』

『あら失礼ね。私は、ただあなたが言わないから代わりにスバル君に事情を説明してあげようとしているだけよ』

『ツケ、余計な御世話だ！！それよりも、良いのかよミソラをほつといて』

「え！ミソラちゃんに何かあったの？ハーブ、ミソラちゃんは、大丈夫なの？」

ウォーロックの言葉を聞いて顔色を変えて尋ねるスバルにハーブは、くすくすと笑いながら

『ええ、大丈夫よ。その証拠に……』

ハーブの言葉にスバルが首を傾げて？を浮かべていると

「スバルくん」

「うわぁー！」

突然、後ろからミソラに抱きつかたスバルは、顔を赤くして、その場に硬直してしまった。

「ん？スバル君……」

スバルが何の反応をしないことに不審に思ったミソラがスバルから離れ、スバルの正面を覗いてみると

「あ！固まってる。……スバル君、スバル君」

スバルが硬直していることに気付いたミソラが名前を呼びながらスバルの体を揺すった。

「っは！ミ、ミソラちゃん！！」

硬直が治り正気を取り戻したスバルの目の前に至近距離でのミソラの顔が視界に入り、先ほど以上に顔を赤くして慌てふためくスバルの反応に

「そんなに驚かなくてもいいのに」

頬を膨らませて、不機嫌そうに言うミソラに

「ご、ごめん、ミソラちゃん。機嫌直して」そっぽ向いているミソラに必死に謝るスバル

「どうしよっかな〜……まっ、今回は、許してあげる。」

「っえ！ホント」

「だって、スバル君が、私のことそんなに心配してくれていたんだからね」

嬉しそうな顔をして言うと

「あ、当たり前だよ。ミソラちゃんは、僕の初めてのブラザーで、僕の一番大切な人なんだから心配するのは、当然だよ」

指で顔を掻きながら照れくさそうに言うスバルの言葉に顔を少し赤くして

「わ、私もスバル君のこと一番大切な人だと思ってるよ。でも、一人で、あんまり無茶しないで。スバル君に何かあったら私……」

ミソラが喋っている途中、ミソラの目から涙がこぼれるのが見えたスバルは、ミソラをそっと抱きしめた。

「す、スバル君」

ミソラは、突然のスバルの行動に動揺していると

「大丈夫だよ。もう無茶なことしないし、ミソラちゃんを悲しませたりしないよ。だから、涙を拭いて。」

スバルの言葉にホツとしたのか涙を拭き、ミソラもスバルを抱きしめ

「スバル君、さっきのホント？」

「ホントだよ。絶対にミソラちゃんを悲しませたりしないよ。約束する。」

「約束だよ」

そう言うと二人は、しばらくお互いに抱き合っていた。

『ツケ！焦れったい奴らだぜ！』

二人の様子を離れた場所で見っていたウォーロックが呟いていると

『良いじゃないの。これも青春ってやつよ』

嬉しそうに微笑みながら二人を見ているハープにウォーロックは、あきれたような顔をして

『ツケ、俺には、よくわからねーな。……そういや、なんであいつらが一緒に居る時は、いつも俺を連れていく?』

『あんたが一緒だとせつかくの良いムードが台無しになるからよ!』

『何だと!それのどこが悪い。』

『悪いに決まっているじゃないの。せつかくの良いムードを台無しにしてどうするのよ!』

『あいつらが焦れったくてしょうがねえんだよ!好きなら好きって言えばいいじゃねーか!』

『あんたみたいにあの二人は、単純じゃないのよ。あの子たちはね。だからそっで見守ってあげなさいよ』

『ツチ！しゃーねーな』

しぶしぶハープの言うことを利いて二人の様子を見守ることにしたウォーロックであった。そんなウォーロックの様子をくすくす笑いながら

『あなたも変わったわね』

『あん？何か言ったか？』

『いいえ』

そう言うとハープも再び二人を見守ることにした。それから数分後

『ウォーロック、そろそろ帰るよ。出てきてよ』

『ハープ、私たちも帰るから戻ってきて』

ウォーロックとハープを捜すスバルとミソラの声が聞こえ

『なんだ、もう終わりか』

『そうみたいね。行きましようか』

そう言うとウォーロックとハーブは、スバルとミソラのもとへ行った。

「ウォーロック、どこ行ってたの？」

『あ？ちよつとな』

スバルの質問をごまかすウォーロックの様子を見てくすくす笑っているハーブを見て

「どうしたのハーブ？」

『ん？何でもないわ、ミソラ。』

「そう。それじゃあ私たちも帰ろうか。明日の準備もあるしね」

『そうだったわね』

「それじゃ、スバル君。また、明日」

「うん。また明日……ん？また明日？それってどついつ……」

スバルがミソラに尋ねる前にミソラが電波変換して帰って行った。

「いったい、どついつ意味だったんだろう。ねえウォーロック、ハ  
ープから何か聞いてない？」

『俺が知るかよ！それよりも俺たちも帰ろつぜ』

「うん。そうだね。今日は、いろいろあつて疲れちゃったよ」

そう言つとスバルも自宅へ帰って行った。

「ただいま」

「お帰りなさいスバル」

「あれ、父さんは、まだ帰ってないの？」

家に帰ったスバルが玄関に大吾の靴がないのを見てあかねに尋ねると

「ええ。今日は、手の離せない仕事があるから遅くなるって大吾さんから電話があったから、スバルは、先にお風呂入ってきなさい。その間に晩御飯の用意しとくから」

「はーい」

そう言うとスバルは、自分の部屋に行き、着替えを持って風呂場に向かった。そして、風呂から上がったスバルがリビングに向かい、あかねが用意した晩御飯を食べ、自分の部屋に行くとスバルは、ベットに倒れるように寝そべった。

『おい、スバル、飯食ってから寝ると豚になるんじゃないか』

「……………」

『ん？何だもう寝てるのか。まあ、俺も今日は、疲れたことだし俺も寝るか』

そう言うとウォーロックは、ハンターの中に入っていた。

### ミソラ宅

「ただいまー。っけていても私一人だっけ」

『一人じゃないでしょ、ミソラ』

「そうだったね、ありがとうハーブ」

『それじゃあ、早く明日の準備を終わらせましょう』

「うん。」

そう言うとミソラは、自分の部屋へ向かって、何かを始めた。そして、数時間後

「ふうー。終わったー」

ミソラが、ベットに寝そべって言うと

『お疲れ様、ミソラ』

「ありがとうハーブ。でも今日は、いろいろあって疲れたよ」

『それじゃあ、もう休みましょうか……っってもう寝てるし。まあ、今日はいろいろ有ったから疲れたのね。お疲れ様ミソラ』

そう言うとハーブもハンターに戻って行った。



第10話 約束（後書き）

感想、アドバイスを待っています。

第11話 朝（前書き）

かなり久しぶりの更新です。

## 第11話 朝

『さてと、そろそろスバルを起こし始めるか』

ウォーロックがいつもの様にスバルを起こすためハンターから実体化してスバルのもとへ行くと

「あ！おはよう、ウォーロック」

『あ、ああ。今日は、どうしたんだ。やけに早起きじゃねーか』

「うん。ちょっと、目がさめちゃったからね」

『まあ、スバルが毎日、そういうふうに起きてくれれば俺も楽なんだがな。……ところでスバル、何でそんなに顔が赤いんだ？風邪でも引いたのか？』

「え！あ、いや、これは……大丈夫だよ」（昨日の展望台でのことを夢で見て、目が覚めただなんてウォーロックには、口が裂けても言えないよ）

『ならいいんだけどよ』

「とりあえず、朝ごはんを食べに行こう。」

そう言うとスバルは、タンスから着替えを出し、着替えて洗面台に行き顔を洗ってリビングへ向かった。

リビングでは、茜が朝食の準備をしていた。（そろそろ、ロック君がスバルを起こすころね）と呟いていると

「母さん、おはよう」

「あら、スバルおはよう。今日は、珍しく早いね。毎日スバルがそういつぶうに起きてくれればロック君も助かるでしょうに」

『全くその通りだぜ、オフクロ』

「もう、二人して言わなくてもいいのに……そう言えば、母さん、父さんは、まだ仕事なの？」

「ええ。かなり忙しいみたいなのよ」

「そうなんだ」

「とりあえず、スバルは、早くご飯食べちゃいなさい。せっかく口ツク君に起こされないで起きたんだから」

『全くだ』

「もう、分かってるよ」

(何で、いつもウォーロックは、母さんの前では、良い人ぶるんだろ。人じゃなくて宇宙人だけ)

『ん？なんか言ったかスバル』

「ううん、なんでもないよ。」

スバルは、ウォーロックに聞こえたかと思いいわてて朝食を食べだすのだった。

朝食が終わり、リビングから出ようとした時

「あ！スバル、ちょっと待って」

「何？母さん」

「昨日、大吾さんから電話が有った時スバルに伝言も頼まれてたのよ。」

「伝言？」

「ええ、『今日、学校が終わったらこっちに来てくれ』って言うってたわ」

「分かった。じゃあ、学校が終わったら行ってみるよ」

そう言うとスバルは、リビングを出て洗面台で歯を磨き、部屋で支度をしていると“ピリリ”っとハンターが鳴り、スバルがハンター画面を見ると

「あ！ミソラちゃんからメールだ……なになに、“今日、学校でビツクリするよな事が起きるかも”……ん？いったい、どういう意味なのかな？」

『さあな、行けば分かるんじゃないか』

スバルがミソラからのメールの内容に疑問を抱いていると“ピンポーン”と玄関のベルが鳴り

「スバルー委員長さんが迎えに来たわよー」

「え？今日は、いつもより少し早くないかな。」

『良いんじゃないか』

「うん。でも、何か嫌な予感がする。」

『だあー！…つべこべ言っていないでさっさと行け！』

「分かったよ」

スバルは、ウォーロックに怒鳴られ、慌てて部屋を出て玄関に向かった。

「スバル、結局ロック君に怒られたわね」

くすくす笑いながら慌てて降りてきたスバルを見て言うと

「もう、そんなに笑わなくてもいいのに」

「ごめんなさい。あとスバル、帰りに大吾さんのところに行ったら  
にコレを渡しといて」

「母さん、コレは？」

「電話で頼まれた書類や着替えよ」

「分かった、じゃあ行ってきます」

「行ってらっしゃい」

「……あ！」

スバルが扉を開けるとそこに腰に手をあてて仁王立ちしている委員長が居た。

「おはよう、星河君」

「お、おはよう、い、委員長」

委員長の顔は、微笑んでいる様に見えるが明らか怒っているのが分かり、スバルは、脅えながら言い返すと

「昨日は、どこに行っていたのかしら」

「き、昨日は、用事が有ったからすぐ帰ったよ」

「嘘、おっしゃい！！あなたが昨日ロックマン様になって誰かと一緒にどこかへ行ったのは、分かっているんだから、正直に白状しなさい！！さもないと、強引にでも聞き出すわよ。キザマロ、ゴンタ」

「「は、はい！」「」

委員長の命令で脅えながらキザマロとゴンタが出てきてスバルの左右に移動する。

「これで、もう逃げられないわよ。さあ観念して白状して言いなさい」

「分かった、白状するから。とりあえず学校に早く行くつよ。このままここで話して居たら遅刻しちゃつよ」

「それも、そうね。それじゃあ行くわよ。」

「「「はー」「」」」

(ねえ、委員長なんかあったの?)

(昨日、お前が委員長の誘いを断ってどっか行ったりするからだぞ！)

(ゴンタ君、あなたがち間違っていませんが、スバル君が、昨日誰かと一緒にどこかに行ったということが委員長の癪に障ったみたいですよ)

(え！)

(ですから、ここは、正直に話した方が身のためですよ)

(うーん、正直に話したら確実に殺されるような気がする)

「そこ！ぶつくさ喋っていないで、早く来なさい！」

三人が委員長の後ろでコソコソ話しているのがさらに委員長の癪に障り、怒鳴り散らす委員長。

「星河君」

「はい！」

「いつになったら喋ってくれるのかしら」

「あー！ごめん、今から話すよ」

スバルは、委員長に脅えながら昨日の出来事を全て話した。ただし、展望台での出来事を除いて

「……と言っわけです。委員長」

「スバル！テメエ、あれからずっとミソラちゃんと一緒だったの  
よ」

「スバル君、君に同情した僕が間違っていました。」

「お黙り！キザマロ、ゴンタ」

「「すみません（でした）委員長」」

委員長の一言で、黙りこむキザマロとゴンタ。そんな二人の様子を見てスバルも次は、自分が怒鳴られる番だと思い覚悟を決めていた。

「さて星河君、ミソラちゃんとのことは後でゆっくり話すことにして、やっぱり星河君たちが今朝のニュースで言っていた事件に関係があったみたいね」

「え？それどういいうこと委員長」

「どづいいうことって…あなた、まさか今朝のニュースまだ見てないの」

「うん。今日は、まだ見てないんだけど、そのニュースで言っていた事件に僕たちが関係しているの？」

何食わぬ顔で尋ねるスバルに委員長が呆れたような表情をしていると

「委員長、そろそろ急がないと時間が……」

キザマロに時間といわれ、自分のハンターで時間を確認する。現在

“ 8：20分”あと10分で遅刻だ。

「ちょっともうこんな時間じゃないの！キザマロ、どうしてもっと早く言わないのよ！」

「すみません。委員長」

「とりあえず、星河君残りの話は、後で話してあげる。」

「う、うん。分かった」

「とどかく急ぐわよ」

「「「はい」」」

4人は、その場から大急ぎで走って行った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3432g/>

---

流星のロックマン ギャラクシー

2010年10月10日19時54分発行